

2022 年度版 文学部 教育に関する点検・評価報告書

(2023 年度発行)

1. 入学者選抜に関する点検・評価（要約版）

文学部のアドミッションポリシーは、以下のとおりである。

文学部では、「英語圏あるいは日本や地域の言葉、文学、文化に強い関心を持つ人」「それらを学ぶことを通して人間の営みについて考えを深め、鋭い感受性、論理的な思考力や柔軟な理解力を持ち、自分の言葉で明快に表現しようとする人」を求めています。（以下略）

入学者選抜について、入試形態ごとに点検・評価を一覧表とすると、以下の通りである。

選抜のタイプ	入学後の学修状況	妥当性
一般	把握資料； 成績表、GPA 推移データ、必修科目への出席状況、全教員による、出欠状況の情報共有（メールによる） ペーパーによる試験の学力を重視する入試形態なので、学力の推移を追跡することが重要である。概して優秀な成績で推移している。	妥当と判断される。 （共通テスト利用入試では学科によって日本語・外国語素点からの換算比率が異なるので、入学後の語学の成績追跡は特に重要となる。）
学校推薦型	把握資料； 成績表、GPA 推移データ、必修科目への出席状況、全教員による、出欠状況の情報共有（メールによる） 高校別の各種データなど。	妥当と判断される。学校間の学力格差が心配されるところであるが、入学後の出欠・成績との相関は高くない。

総合型

把握資料；

成績表、GPA 推移データ、必修科目への出席状況、全教員による、出欠状況の情報共有（メールによる）
主として学年担当教員と学生委員会による行動把握

妥当と判断される。

（多様性を重視する入試形態なので、特に協調性に関する追跡が重要である。稀にエキセントリックな学生が入学することがあるが、多様性の観点からむしろ望ましいと考えられる）

1. 入学者選抜に関する点検・評価（詳細版）

はじめに

文学部のアドミッションポリシーは以下のとおりである。

文学部では、「英語圏あるいは日本や地域の言葉、文学、文化に強い関心を持つ人」「それらを学ぶことを通して人間の営みについて考えを深め、鋭い感受性、論理的な思考力や柔軟な理解力を持ち、自分の言葉で明快に表現しようとする人」を求めています。具体的には、次のような学生です。

- 1 言語・文学・文化を学ぶための基礎的な日本語力・英語力を身に付けた人
- 2 論理的な思考力と明快な表現力を持つ人
- 3 多様なバックグラウンドを持つ他の学生と協調して勉学・研究を進めることができる人

文学部の入試は、単なる選抜のための選抜ではなく、上記のアドミッションポリシーに基づき、言語・文学・文化に関心を持ち、強靱な思考力と表現力を身につけることを目指して勉強を進めていける入学者を、多様に受け入れたいとする学部がそこに表現されたものである。

2020年度入試まで、長年にわたって、AO入試、推薦入試、試験入試、センター試験利用入試という、全く形態の異なる4種類の入試を、毎年、多大な労力をかけて実行し続けてきたのは、この目的のためである。「新入試」制度移行に伴い、その入試は以下に述べるように変わっているが、上記の基本的な考え方には変化がない。

現在の入試制度概要は以下に述べるとおりで、選抜方法が入試種類ごとに大きく異なったものになっているのは、来歴や入学時の学力が様々であっても、文学部で勉強していけば必ず成果を上げ、自らの未来を切り開いていけるという学生の可能性を信じて、意図的にそうしているものである。また、学部全体として大所から見れば、このようにして学生の多様性を維持することは、学生の協調性・社会性の涵養に役立ち、学修の効果を上げるとともに、将来の社会人としての資質を育むという利点もある。なお、面接や小論文を課

すものについては、すべて複数の教員によって行い、かつ、予め採点基準を決めてあって、恣意的な評価が入る余地がないようにしている。

① 総合型選抜「未来デザイン入試」

アドミッションポリシーのうち、「3 多様なバックグラウンドを持つ他の学生と協調して勉学・研究を進めることができる人」という点に最も強く関連している。（旧制度のAO入試の性質を、一部発展的に吸収）

② 学校推薦型選抜：Ⅰ期、Ⅱ期。2022年度はⅢ期・4期も実施。専願制。

アドミッションポリシーのうち、「1 言語・文学・文化を学ぶための基礎的な日本語力・英語力を身に付けた人」及び「2 論理的な思考力と明快な表現力を持つ人」に強く関連している。公募制推薦と指定校制推薦とに別れる。過年度の卒業生、すなわち俗にいう「一浪」までを受験可能としているのが、本学の特色（文学部だけではない）である。小論文 800 字程度を事前提出させるほか、高校の評定平均点は数値化して合否判定に利用する。面接の形態は総合型選抜の面接に外見上似ているが、面接における質問内容などは異なる。面接は複数の教員によって行い、かつ、予め採点基準を決めてあって、恣意的な評価が入る余地がないようにしているのは同じである。面接者からの面接結果を受けて、小論文の得点、数値化した評定平均と合算し、これによって合否を判定する。（旧制度の推薦入試の性質を一部発展的に吸収）

③ 一般選抜（一般入試）：Ⅰ期とⅡ期。併願制で他学部を同時に受験可能。

この入試形態ではペーパーテストの点数のみで合否判定する。アドミッションポリシーのうち、「1 言語・文学・文化を学ぶための基礎的な日本語力・英語力を身に付けた人」及び「2 論理的な思考力と明快な表現力を持つ人」に強く関連している。

本学の入試問題は、「英語」はごく標準的な問題で、「基礎的な英語力」を問う。記号で答える欄も多い。「国語」の問題では、伝統的に 20 世紀の頃から記述式の設定が必ず一題以上あった。また、単純な二者択一などは避け、むしろ複数の正解を積極的に認める出題と採点基準とすることで、「論理的な思考力と明快な表現力」を試している。開学以来本学の目指してきた方向性が正しかったことが、「新入試」制度によって実証された形である。（旧制度の試験入試の性質を一部発展的に吸収）

④ 一般選抜（大学入学共通テスト利用入試）：A 日程、B 日程およびC 日程。

C 日程が3月のかなり遅い時期に設定されているのが特徴の一つである。共通テストの点数をセンターより受信し、その点数のみで合否を判定する。アドミッションポリシーのうち、「1 言語・文学・文化を学ぶための基礎的な日本語力・英語力を身に付けた人」に強く関連している。文学部において受験科目は英語と国語に加え選択科目一つの合計3科目だが、点数配分は英語・英米文学科科が英語 200 点・国語 100 点・選択科目 100 点の

合計 420 点満点であるのに対し、日本語・日本文学科は英語 200 点・国語 200 点・選択科目 100 点の合計 520 点満点であるところが異なる。合否判定は入試委員会において原案を作成し、最終的には教授会において決定する。(旧制度のセンター試験利用入試の性質を一部発展的に吸収)

入学者の追跡

以上のように様々な形式の入試によって入学した学生の、入学後の学修状況を把握するためには、成績等について追跡調査を行う必要がある。

文学部において、入学者の成績の追跡は、各種奨学金の貸与を受けている者について学部開設時(50年前)から行なっていた。しかし、それ以外の学生をも含む全数追跡(悉皆調査)については以前には実施していなかったため、新たに 2017 年度入学生から開始している。

一方、文学部では 2018 年度にカリキュラムの変更を行い、上述のように新カリキュラムが年次進行した結果、2021 年度末(2022 年 3 月)に完成を見た。ただし、新カリキュラムの得失については、順次追跡中であるが、2022 年 7 月末現在、卒業生への卒業後アンケートが未実施であることなどから、まだ完全な分析には至っていない。

とはいえ、年次進行によって 4 年間の学修実績を完全トレースできるところまできたので、データは着実に累積できており、近い将来、完全追跡のデータが揃う見込みである。

資料②

入試形態ごとの追跡も 2018 年度から始めたので、累積データはそれなりに揃っている。入試制度の大改革により 2023 年度以降に直結しない部分もあるが、重要なデータであり、引き続き検証・分析を行っているところである。

【課題】

以上の検証をとおして、2022 年度末までに見出された課題は次のとおりである。

- 1) 入学者全員に対する成績等の調査について、その途中経過の分析が十分でない。
- 2) 入試制度については、「新入試」として全国的な大改革となったため、記述式の問題の分量と難易度、また「正解」の考え方自体についてなど、なお議論の余地のあるところがある。他学部の考え方とのすり合わせも必須である。

なお、延々と続くコロナ禍で作業が思うように進行しない面があったことは否めない。

以上を一覧表としたものを以下に掲載する。

選抜のタイプ

入学後の学修状況

妥当性

一般	<p>把握資料； 成績表、GPA 推移データ、必修科目への出席状況、全教員による、出欠状況の情報共有（メールによる）</p> <p>ペーパーによる試験の学力を重視する入試形態なので、学力の推移を追跡することが重要である。</p>	<p>妥当と判断される。 共通テスト利用入試では学科によって日本語・外国語素点からの換算比率が異なるので、入学後の語学の成績追跡は特に重要となる。</p>
学校推薦型	<p>把握資料； 成績表、GPA 推移データ、必修科目への出席状況、全教員による、出欠状況の情報共有（メールによる）</p> <p>高校別の各種データなど。</p>	<p>妥当と判断される。学校間の学力格差が心配されるところであるが、入学後の出欠・成績との相関は高くない。</p>
総合型	<p>把握資料； 成績表、GPA 推移データ、必修科目への出席状況、全教員による、出欠状況の情報共有（メールによる）、主として学年担当教員と学生委員会による行動把握</p> <p>。</p>	<p>妥当と判断される。 （多様性を重視する入試形態なので、特に協調性に関する追跡が重要である。稀にエキセントリックな学生が入学することがあるが、多様性の観点からむしろ望ましいと考えられる）</p>

2 教育課程・カリキュラムに関する点検・評価（要約版）

はじめに

文学部のカリキュラム・ポリシーは、以下のとおりである。

英語圏あるいは日本または地域の言葉・文学・文化に強い関心を持ち、それらによって学ぶことによって論理的な思考力と高度な表現力を身につけた人材を育成するために、基礎科目、一般教育科目、外国語、専門教育科目を各学年にバランスよく配置し、順次性のある体系的カリキュラムを編成しています。様々な学生のニーズに的確に応えるため、柔軟で自由度の高い組み立てになっており、教職・学芸員・社会教育主事・日本語教員などの資格取得に関する科目も幅広く設置しています。

2018年度から新カリキュラムに移行し、2021年度末（2022年3月）に完成した。

新カリキュラムの要点は以下のとおりであるが、カリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーに即しており、適切である。（資料②③）

- 1 全ての講義演習等において、可能な限り少人数教育を守ること。
これは、カリキュラム・ポリシーにいう「論理的な思考力と高度な表現力を身につけた人材を育成する」ために必須の条件である。
- 2 基礎的な科目から高度な科目まで、体系的に組み立てられていること。
このために科目ナンバリング（資料④）、カリキュラム・ツリー（資料⑤）を明示し、適切な学修を支援している。これは、カリキュラム・ポリシーにいう「順次性のある体系的カリキュラム」を実現するためである。柔軟性の高いカリキュラムになっているのが文学部の特徴である。
- 3 高校の学習との接続に十分留意すること。
このために「基礎科目」というカテゴリーを新たに設け、学生によっては入学時に必ずしも十分とは言えない基礎学力を補うべく対応している。

【課題】

2022年度末までの検証をとおして見出された課題は次のとおりである。

- 1) GPA を利用した追跡調査は行われているが、まだ完全とは言えず、更に項目を増やしての精密な調査が必要である。
- 2) カリキュラムに対して、学生の学修が不足している場合がある。特に予習復習の時間が少なめに見える場合がある。
- 3) 卒業論文以外の、卒業時の学力（達成度）を測る指標が曖昧なので、卒業試験など、厳格化をカリキュラム上で検討する必要がある。

2 教育課程・カリキュラムに関する点検・評価（詳細版）

0 はじめに；前提となる考え方

大前提1；カリキュラムの内容

弘前学院大学では、全学における教育の基本的な方針として「少人数教育」と「オーダーメイド教育」のふたつを掲げている。文学部のカリキュラム内容は、全てこれを前提として組み立てられている。

現行のカリキュラム（2018年度カリキュラム。または学内的にはカリキュラム2018と呼称）の内容および特徴的な部分は、以下の通りである。なお、資料として現カリキュラムを策定した「カリキュラム検討委員会」の資料を添付する。（資料②③）（添付資料中、「現カリキュラム」「これまで」等とあるのは旧カリキュラム＝2020年度に最後の卒業生を出して終了する＝のことである。）

大前提2；学修方法

「少人数教育」と「オーダーメイド教育」の観点から、あくまでも**基本は少人数、双方向**の授業で、特に**少人数による「演習」の形態を重視し、多数設置**している。現状で学生側から見て受け身中心となる講義が絶無とまでは言えないが、後掲のカリキュラムツリー、またカリキュラムマップを見ても、少人数が基本であることは一目瞭然である。

例えば、**専任教員が担当する科目の場合、文学部では受講生がごく少数でも開講し、単位を修得させる**。実際に、少人数で開講されている科目も多い。開講科目と受講人数の一覧を添付する。資料⑥

このようなことは、大学運営のコスト的には非常にプレッシャーであり、担当教員の負担も大きくなりがちであるが、少人数教育の牙城を守るべく、教員の使命感によって維持されていると言ってよい。しかし、労働環境としてそれが良いというわけではないので、増員など改善が望まれるところである。

なお、文学部では、過去（2021年度まで）一年間に修得できる単位数の上限を、大学設置基準に従って48単位と定めていた（CAP制と称する。資格関係を除く）。さらに、本学では文学部のみにある制度として、一年間の最低修得単位数を定めていた。

この2つのルール（上限と下限）は、自由度の高いカリキュラムを持つ学部として、学生が実力以上のスケジュールを組むことを防ぎ、かつ、逆に安逸に流れて学業をおろそかにすることがないように設定されているものであった。しかし、もちろん完璧なものとは言えなかったため、社会全体や他大学の現状にも照らし、これを廃止して**2022年度からGPAによる進級条件と単位数上限を新たに定めたところである。（後に詳述）**

大前提3；学修支援

日々の学修、生活上の問題などについて、広く相談できる窓口として、「学年担任制」を取っている。これは、他学部でいうチューター制と実質、全く同じものだが、長い歴史のある文学部では、歴史的な呼称をそのまま使っている。

また、これとは別に、各教員は毎週、少なくとも90分以上、学生が予約（アポ）なしで教員の研究室を訪れることのできる時間をあらかじめ設けている。この時間、教員は予約のあるなしに関わらず必ず在室する。文学部ではこれをオフィスアワーOffice hours と呼称している。資料⑧

さらに、多くの教員が少なくとも一つ以上のメールアドレスを公開しており、様々な事情で登校できない場合でも、相談できる体制を整えている。現に、レポートの出し忘れや期日の間違い、卒論執筆の際の不手際など、様々な危険を、このシステムによって回避できている。資料⑨

また、2021年度からは、Microsoft Teamsの導入に伴い、Teams上でレポートの提出や出席確認などができるようになってきている。なお、一部の教員では、これに加えて、Teamsの「課題」や「reflect」「insight」などを利用した学修支援体制が取られているが、文学部の全ての教員がそうであるとまでは言えない。

1 以上を大前提として、実際のカリキュラムについて、以下に詳述する。

1-1. 現在のカリキュラムに至る経緯

文学部のカリキュラムは、2018年度に一新した。このカリキュラムに至った経緯、背景、理由は、以下の通りである。

文学部では、数年に一度の割合でカリキュラムの大幅な見直しをしている。その際には、「カリキュラム検討委員会」が組織されるが、この委員会は学部長からも学科からも独立して、場合によっては学科再編まで提案できるという権限を持っている。この委員会の設置について定めた明文規定は無く、実際に学科再編まで踏み込んで提案された例も過去にないが、委員会の提言範囲に制限を設けないというのは、文学部の過去五十年間の歴史において形作られてきた伝統であり、2018年カリキュラムの検討が始まった時にも、当然のように踏襲された。

その 2018 カリキュラム検討委員会における問題意識は、大略、以下のようなものであった。

1 外的環境の変化

社会の大きな変化が非常に短いスパンで起こる現代において、学問の府である大学もまた、時代や社会のありように合わせた変革を求められている。(例；「学習成果(アウトカム)重視」)

2 18歳人口減と入学者数

2024年には東北地区における18歳人口の減少率の予測は2013年比-24.8%（全国平均-13.6%）である。青森県の18歳人口は同年10,020人と見られる。学生募集の点で文学部は苦戦を強いられている。とりわけ、英語・英米文学科は2015年に20名を下回っており再浮揚が強く望まれる。

このような問題意識に基づき、作成したものが、現行の2018カリキュラムである。(当時、大学としてのPRが不十分だったことが入学者の減少に影響した面もあるとみられ、また全ての問題がカリキュラムだけで解決できるわけでもないが、ここではカリキュラムに論点を絞って記述する)

1. 2 現行のカリキュラムについて

文学部のカリキュラム・ポリシーは、以下のとおりである。

英語圏あるいは日本または地域の言葉・文学・文化に強い関心を持ち、それらによつて学ぶことによつて論理的な思考力と高度な表現力を身につけた人材を育成するために、基礎科目、一般教育科目、外国語、専門教育科目を各学年にバランスよく配置し、順次性のある体系的カリキュラムを編成しています。様々な学生のニーズに的確に応えるため、柔軟で自由度の高い組み立てになっており、教職・学芸員・社会教育主事・日本語教員などの資格取得に関する科目も幅広く設置しています。

また、ディプロマポリシーは以下の通りである。

文学部 基礎科目 4 単位、一般教育科目 28 単位、外国語保健体育 10 単位、専門教育科目 7

2 単位、自由選択科目 14 単位の計 128 単位を修得し、論理的な思考力と高度な表現力によつて、個人の生活や社会における問題を柔軟に解決していく能力を身につけた学生に学位を授与します。

これによって成立したカリキュラムを、次に一覧として示す。

まず、共通教養については以下のカリキュラムツリーのとおりである。

科目群	基礎科目	一般教養科目				教養演習	外国語・保健体育	キャリアサポート・単位互換		
		キリスト教	人間・社会	自然	地域			単位互換	キャリアサポート	
4年次										
3年次		キリスト教II				教養演習Q 教養演習P 教養演習O 教養演習N 教養演習M 教養演習L 教養演習K 教養演習J 教養演習I 教養演習H 教養演習G 教養演習F 教養演習E 教養演習D 教養演習C 教養演習B 教養演習A		キャリアデザインF キャリアデザインE	基礎数学C 基礎数学B 基礎数学A 実践英語O 実践英語C 実践英語B 実践英語A 小論文演習 常識日本語B 常識日本語A 教職教養D 教職教養C 教職教養B 教職教養A	
2年次	2年次以降の 各科目群へ	聖書と文学	経済学B 経済学A 法と社会B 法と社会A				英語III 英語IIA スポーツ科学実技F スポーツ科学実技E スポーツ科学実技D スポーツ科学実技C スポーツ科学実技B スポーツ科学実技A スポーツ科学講義	選択教養	キャリアデザインD キャリアデザインC	
1年次	基礎演習II 基礎演習I	キリスト教文化 キリスト教音楽 キリスト教I	現代の社会と文化B 現代の社会と文化A 歴史と社会B 歴史と社会A 教育と人間B(社会教育) 教育と人間A(生理学習) 心と身体B 心と身体A 政治学B 政治学A 哲学と倫理B 哲学と倫理A	ヘルスサイエンス論 科学と現代D 科学と現代C 科学と現代B 生命の科学B 生命の科学A 環境の科学B 情報の科学A	地域研究B 地域研究A	英語III 英語IIA スポーツ科学実技F スポーツ科学実技E スポーツ科学実技D スポーツ科学実技C スポーツ科学実技B スポーツ科学実技A スポーツ科学講義 独仏中韓D 独仏中韓C 独仏中韓B 独仏中韓A 英語ID 英語IC 英語IB 英語IA	韓国語(話す) 韓国語(書く) 韓国語(読む) 韓国語(聴く) Listening Speaking Writing Reading	キャリアデザインB キャリアデザインA		

2018年度から新カリキュラムに移行し、2021年度末（2022年3月）に完成した。（ただし、休学中のもの、留年中のものもあるので、旧カリキュラムが完全に消滅したというわけではない）

現在のカリキュラムの要点を、カリキュラム・ポリシーに即し、ディプロマ・ポリシー達成のためという観点から整理すると、以下のとおりである。

弘前学院大学文学部は、計128単位以上を修得し、卒業論文を提出することで、学位取得が可能となる。この単位数に応じた科目は、カリキュラム・ポリシーをリシーを基に設定され、ディプロマ・ポリシー（DP）を実現するために設定されている。現行のカリキュラムでは特に、アクティブ・ラーニングの要素をバランス良く取り入れることを目指している。

英語・英米文学科及び日本語・日本文学科に共通する方針

- 1-1. 大学における学びに必要な基礎を養うために、アクティブ・ラーニングを中心とする必修科目である「基礎科目」を設定する。
- 1-2. 建学の精神に基づいた幅広い教養と人間性を身につけるために、「キリスト教」「人間・社会」「自然」「地域」についての4分野から成る選択必修科目を「一般教育科目」として設定する。

1-3. 単に幅広い内容を学ぶのみならず、特定のテーマについてより深く学ぶための選択必修科目である「教養演習」を設定する。

1-4. 学びの幅を広げるために、必修科目である英語と、選択必修科目である英語以外の言語を「外国語科目」として設定する。

1-5. 一般的な知識のみならず、運動や健康についての知識の獲得とその実践のために、スポーツの実技及び講義を「保健体育科目」として設定する。

1-6. 学びの多様性を担保するため、国内外の大学との単位互換科目を設定する。

2-1. 現代社会への理解を深めることを通して、将来のビジョンを描き、自らの将来に対する準備を進めるための系統だった科目を「キャリアサポート科目」として設定する。

2-2. 自身のキャリアデザインに応じ、必要な能力を育成するための選択科目を「キャリアサポート科目」として設定する。

一方、各学科に固有のことは、以下のようにまとめられている。

まず、英語英米文学科のカリキュラムマップを以下に示す。

文部省 英語・英米文学科 カリキュラムマップ

ディプロマポリシー

※1) 本表に掲載する授業の履修は、学生自身の専門的知識・技能の習得に必要と認められる科目を履修することによって、高い専門性・応用性を有する人材を育成することを目指す。また、専門的知識・技能の習得に必要と認められる科目を履修することによって、高い専門性・応用性を有する人材を育成することを目指す。また、専門的知識・技能の習得に必要と認められる科目を履修することによって、高い専門性・応用性を有する人材を育成することを目指す。

科目	科目名	単位数	前期				後期				前期				後期			
			履修	履修	履修	履修	履修	履修	履修	履修	履修	履修	履修	履修	履修	履修		
基礎教育科目	基礎演習Ⅰ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	基礎演習Ⅱ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	英語ⅠA	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	英語ⅠB	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	英語ⅠC	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	英語ⅠD	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	英語ⅠE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	英語ⅠF	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	英語ⅠG	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	英語ⅠH	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
英語ⅠI	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

これは、以下のような英語・英米文学科固有の方針に基づいて定められている。

3-1. 専門的な学びを始める前段階として、言語・文学・文化に関する理論の概要と、高校までの学びを復習する Reading の科目を「専門基礎科目」として設定する。

3-2. 英語でのコミュニケーション能力向上のため、英語の使用を促進する必修科目として、4年間にわたる「English Communication 科目」を設定する。

4-1. 英語への理解を促すよう、英語学についての系統だった科目を「専門教育科目」として設定する。

4-2. 欧米の文学・文化に関して、これを俯瞰すると同時に多様な視点から学びを深めることができるよう、文学・文化についての系統だった科目を「専門教育科目」として設定する。

4-3. 両学科にまたがる専門性の高い知識及び技術を学科目を、「共通科目」として設定する。

同様に、日本語・日本文学科固有の方針があるので、それに基づくカリキュラムマップを示す。

文学部 日本語・日本文学科 カリキュラムマップ

ディプロマポリシー: 1. 日本及び海外に関する基礎知識を身に付け、専門的知識を習得し、自ら学習する能力を身に付け、国際的な視野を養い、自ら、自らを高め、社会に貢献できる。2. 言語学・文学・文化に関する基礎知識を身に付け、専門的知識を習得し、自ら学習する能力を身に付け、国際的な視野を養い、自ら、自らを高め、社会に貢献できる。3. 日本語・日本文学に関する基礎知識を身に付け、専門的知識を習得し、自ら学習する能力を身に付け、国際的な視野を養い、自ら、自らを高め、社会に貢献できる。

科目名	単位数	必修		選択		履修条件		備考	
		科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数
総合教育科目	22	総合教育科目Ⅰ	2	総合教育科目Ⅱ	2	総合教育科目Ⅲ	2	総合教育科目Ⅳ	2
基礎教育科目	22	基礎教育科目Ⅰ	2	基礎教育科目Ⅱ	2	基礎教育科目Ⅲ	2	基礎教育科目Ⅳ	2
専門基礎科目	22	日本語学Ⅰ	2	日本語学Ⅱ	2	日本文学Ⅰ	2	日本文学Ⅱ	2
専門教育科目	22	日本語学Ⅲ	2	日本語学Ⅳ	2	日本文学Ⅲ	2	日本文学Ⅳ	2
総合科目	22	総合科目Ⅰ	2	総合科目Ⅱ	2	総合科目Ⅲ	2	総合科目Ⅳ	2
自由選択科目	22	自由選択科目Ⅰ	2	自由選択科目Ⅱ	2	自由選択科目Ⅲ	2	自由選択科目Ⅳ	2
合計	110								

これをディプロマポリシー実現のためのカリキュラムポリシーという観点から概観すると、以下のとおりである。

- 5-1. 専門的な学びを始める前段階として、言語・文学・文化に関する理論の概要と、高校までの学びを復習する古文及び漢文の科目を「専門基礎科目」として設定する。
- 5-2. 日本語への理解を促すよう、日本語学についての系統だった科目を「専門教育科目」として設定する。
- 5-3. 日本の文学に関して、これを俯瞰すると同時に多様な視点から学びを深めることができるよう、文学についての系統だった科目を「専門教育科目」として設定する。
- 5-4. 日本及び日本に影響を与えた国の文化に関して、これを俯瞰すると同時に多様な視点から学びを深めることができるよう、文化についての系統だった科目を「専門教育科目」として設定する。
- 5-5. 両学科にまたがる専門性の高い知識及び技術を学ぶ科目を、「共通科目」として設定する。

【検討、検証、改善】

2018 カリキュラムの成立後も、途絶えることなく検証は行われている。それらの検証を通して幾つかの課題が見出され、かつ改善されてきた。

狭義の「カリキュラム」には当たらないものを含めて次のとおりである。

(1) 上記の「柔軟性」という観点から見て、たとえば年間の最低修得単位数(12 単位ルール)と年間の最大修得単位数(CAP 制=48 単位上限)が適切であるかどうか、再検討が必要とされた。これについては、2020 年度からの、GPA による進級制度の完全導入により、大きく改善された。

- ① GPA 利用の推進
- ② 進級について、GPA 利用への一元化。これに伴って、文学部独自の制度であった 1 2 単位ルールの廃止。具体的には、1 年次から 2 年次への進級においては GPA0.8 以上を条件とし、それ未満の場合は留年(原級留置)とする。2 年次から 3 年、また 3 年次から 4 年に進級するについては、GPA1.0 以上を、同様に条件とする。
- ③ GPA 上位の学生に対しては、「年間 4 8 単位まで登録可能」という CAP 制度の制限緩和(成績優秀者へのインセンティブ);具体的には、GPA 3. 0 以上のものについては、年間 4 8 単位までという CAP 性を緩和し、年間 5 4 単位まで登録可能とする。

(2) 上記の「高校との接続」に関しては、GPA などを利用した追跡調査が行われているものの、どの程度の基礎学力が涵養されたのかは、それだけでは分かりきらないので、更に精密な調査が必要である。

→ これについては、特にこの目的のために新設された「基礎科目」の単位修得状況、学期末試験における得点などを調査しており、到達度については確認できているので、旧カリキュラムに比して大きく改善された。現状の問題は、学術上の講義・演習に参加可能かどうかを判断する“熟練度テスト”を現行の単位修得とは別に行うべきかどうか、という点である。

(3) 「思考力」「表現力」に関しては、学生の学修が総じて不足していると思われる。カリキュラムだけに留まることではないが、後述するように「学習行動・学習成果アンケート」を分析すると、自発的な学修の意欲が低く見える場合があることが特に問題であり、上の項目(2)と同じく、精密な追跡調査と適切な手当が必要である。

(4) 高度な領域までの「体系的」教育という観点から言えば、卒業論文以外に、最終的な学力(卒業時の達成度)を厳しく測る手立てがないことが問題である。現在、他大学では(法政大学、慶應大学などに)「進級再試験」「卒業試験」等を設けている例があるが、本学部の制度としては検討中である。

先述したとおり、この現行 2018 カリキュラムは、順調に年次進行して 2021 年度末で一応の完成年次を迎えた。その成果の細密な分析は、近い将来のコース制への移行において生かされることになる。なお現状での成果を判断するための最新のものとして 2022 年度末（2023 年 3 月）の「卒業時アンケート」がある（資料⑨）。これにより文学部カリキュラムについての評価の一端を知ることができる。

3.文学部を取り巻く状況とカリキュラムについて

3-1 日本社会全体の動向とカリキュラムについて

この通称、「2018 カリキュラム」については、他大学に比べても優れた点が多いと自負しており、当然ながら目下のところ、重大な問題点は、発見されていない。例えば、この規模の大学で、日本文学の各年代と日本文化の広い領域を講義・演習に持つ大学は、全国を見回しても少ない。

とはいえ、原構想から数年を経ているので、時代とのマッチングを考えた場合、微妙にずれてきているところはある。例えば、日本の英語・英米文学系の学部・学科で、近年、グローバルスタディーズ学部・学科に変更したりしているケースなどについては参考とすべき点があるかもしれない。（多摩大学、仙台白百合女子大学など）

以下では、カリキュラム自体の問題点について記述する。

- ①文学部のカリキュラムとして、英語・英米文学科、日本語・日本文学科全てのジャンルと時代を網羅しているとは、なお言い切れない。例えば、古典語（ラテン語、ギリシャ語、古典漢文）の科目は、全くないか単位的に十分とはいえず、現代英語では、例えばオーストラリア英語やインド英語、中国の英語などを学ぶ機会はない。
- ②文化関係科目として映画やマンガについての講義があり、学問の範囲としては広く網羅しているが、講義・演習の選択肢が量的に十分とは言えない。これは「教員組織」の項目で述べることであるが、教員数などの問題とも関係している。
- ③学部全体として文化関係の科目が人気で、例えば 2022 年度の卒業論文構想段階調査で、半数近くが文化関係のテーマである。日本語・日本文学科について言えば、特に最近の傾向としてマンガとアニメに関するものが多い。世界的に日本のマンガ・アニメ（Manga, Anime）がヒットしている情勢に鑑みても、この分野は受験生を惹きつける重要な要素になり、いわゆるキラコンテンツであると言える。また、文学部からは、過去 10 年間にプロフェッショナルなライトノベル作家を少なくとも 2 名、またいわゆる「純文学」系作家を 1 名、それぞれ輩出しており、この点は地域の高校などにも評価されているところである。

英語・英米文学科では、English Camp や海外研修の充実などが挙げられるのだが、過去 3 年間は世界的なコロナ禍により、足踏み状態を強いられた。

- ④英語・英米文学科では、長年、英語力の向上と国際的な感覚の醸成を掲げてきたが、ネ

ット上の自動翻訳や翻訳機、または携帯電話に内蔵された AI による翻訳、果てはチャット GPT に代表される生成 AI の爆発的な普及によって、受験生また一般社会から見た「英語力」の意味は変わってきているように見える。このことは、英語教育の分野では早くから認識されていた。(成田一「自動翻訳の高度化と英語教育」JAPIO YEAR BOOK 2019)

もちろん、文化に関係した高度な英語や、芸術的な文章が機械翻訳できないことは上記論文の筆者も注意しているが、一般的な高校生には、それはわかりにくい。また、コロナ禍で世界的な交通量の縮小が起こる中、学生が将来、国際的なビジネスで力を発揮できるチャンスについて、危惧を抱いたのも致し方ない。コロナが5類変更となり、収束していくとしても、新たな感染症の危険は常にあると考えられるので、この状況は相当長期にわたって続く可能性があると思わなければならない。

また、2022年2月以降のロシアによるウクライナ侵攻の帰趨がどうなるか、2023年もお予断を許さない状態であり、海外留学・海外就職などを主要なモチーフとする学生にとっては、ネガティブな状況であることは間違いない。

⑤英語・英米文学科、日本語・日本文学科の両学科にまたがる「文学部としての基礎科目」の量が適当かどうか。現行では「言語・文学・文化の基礎」がそれにあたるが、1コマつまり年間に15時間である。

⑥数学、物理学、化学、生物学などの、いわゆる理系科目の展開が少なすぎる。

すでに入試科目に「数学」を必須とする文系大学・学部も増えてきており、実際問題として卒業時にIT企業に就職する学生も多い。

⑦資格関係科目は、さまざまな学生のニーズによく応えている。しかし、地域の実情とずれてきている面もある。

3-2 地域ニーズとカリキュラムについて

過去数年の志願者数の推移を見れば、英語・英米文学科の低調と日本語・日本文学科の堅調という傾向が見出せる。過去3年間の入学者数推移を見ると、次の表のようになる。

(定員は両学科とも、すべて50名)

入学者数推移

年度	英文	日文	文学部合計
2020年度	43	57	100
2021年度	33	49	82
2022年度			

日本語・日本文学科にしても磐石というわけでは全くないが、2020年度は定員を多少なりとも超え、全学年を通算するとほぼ定員に近づいているところである。これに対し、英語・英米文学科では全体としても定員の6～7割程度、極端な場合には定員の5割を切っている。この差は、英語に関する上述のような社会全体のトレンドと無関係ではないとも考えられるし、英語・英米文学科について本学自体のPR不足の点があるかもしれない。感染症を含む国際情勢の変化も、相当の影響があるともわれる。

ただし、現時点で、文学部が地域のニーズと微妙にズレを生じつつある側面があることに注意しなければならない。地域ニーズについて、現在のカリキュラムの策定時には、以下のように捉えられていた。

第一志望として本学を選ぶ県内出身者を受け入れ、教育し、卒業生の7割程度を県内就職させているのが現状である。

2. 入学の動機は、「自宅から通える」が最も多く、併願されている大学・学部も弘前大学の人文社会学部または教育学部であり、地域の大学という位置づけは重要である。

3. また、英語・英米文学科は「海外研修・留学プログラムが充実している」こと、日本語・日本文学科は、「魅力ある授業がある」ことが志望動機にあげられており、言語・文学・文化の3つの柱と海外留学等のプログラムの充実といった特色は、地域に受け入れられているものと思われる。

コロナ禍の中、「海外研修・留学プログラム」は、事実上、凍結状態になっていたが、2023年には再開された。しかし、ロシアによる侵略戦争はまだ続いている。青森県あるいは北東北地域における英語・英米文学科への最大の志望動機が「海外研修・留学」であるのであれば、少なくともこの面で不安があることは認めざるをえない。

各種の資格関係科目について；前述した通り、さまざまな学生のニーズによく応えている。しかし、地域の実情とずれてきている面もある。例えば、「司書教諭」の資格は、北東北地域において各学校への配置がなかなか進まない。（11学級以下の中学校における司書教諭発令率；青森県25.5%、岩手県1.0%、秋田県8.6%。文科省「令和2年度「学校図書館の現状に関する調査」結果について」による）その結果、少なくともこの地域では、持っていたとしても就職や仕事に直結しない「使えない資格」となりかかっており、本学における取得者も平均すると年間数名程度に過ぎない。

学芸員資格も、現在、就職先が限られてきているのが実情である。

また、社会教育主事任用資格は、2021年度から社会教育士へと変わり、国家資格となった。国家資格となってグレードが上がった面があるが、公務員の「任用資格」という名称を失ったことによって、公務員との制度的連携が途切れた形になり、公務員志望の高校生・本学の現役学生にとっては、魅力的なものと言い切れないようである。

4. 令和3（2021）年度の教育課程編成議論について

4-1 コース制

文学部では、コース制を導入し、学生個々人のニーズに合わせた、きめ細かい教育を行うことが、すでに学長の指示によって決まっている。中期的計画としては2024年度までにこれを導入することとなっている。現在、文学部を「1学科3コース」に再編する方向で最終的な原案作成が行われており、2023年9月には決定を見る予定である。

4-2 人事を含む問題点

本来的には「教員組織」の問題であるが、カリキュラムとの関連が大きいため、概略をここに記す。

①英語・英米文学科、日本語・日本文学科ともに、歴史学の専任教員がいない。これは文学部としては重大な問題であると考えられる。現実の問題として、本学部の場合、歴史学に関する科目はすべて非常勤講師に頼っているのが現状である。

②英語・英米文学科では、文学・語学どちらの領域の教員も不足している。文学系ではシェークスピアの専門家1名と近代英米文学の専門家1名の、合計2名しかおらず、英語学系は2020年度に着任した講師1名のみである。（学科として文化系にフォーカスしている）

③日本語・日本文学科では、日本語学系の教員が不足しているともみられる。現在、2名のみ。

④日本語教育関係の専任教員1名及び学芸員・社会教育関係の専任教員1名の、合計2名を公募によって2022年度に新規採用したので、当該領域の人材不足は解消された。

3. 学修成果に関する点検・評価（要約版）

学修成果の測定・評価については、直接的評価と間接的評価がある。

1. 直接的評価；卒業率（学位授与率）；2022 年度

・英語・英米文学科****%、日本語・日本文学科****%

資格免許等取得状況

本学部で取得できる資格免許の取得状況は、2022 年度実績で以下のとおりである。

・教員免許；X 名、学芸員；X 名、社会教育士；X 名、日本語教員；X 名、進学率 X%

卒業率については、現時点で日本の大学全体の卒業率が 90%程度と推計されているものとほぼ等しく、学位授与が順当に行われているといえよう。資格免許取得状況については、伝統的な教員免許（英語、国語）の取得者が最も多いが、学芸員、社会教育士、日本語教員の資格取得者も一定程度ある

2. 間接的評価

就職率 2022

・英語・英米文学科****%、日本語・日本文学科****%で就職希望者の就職率は、100パーセント。

アンケート調査—『2022（令和4）年度「学修行動・学修成果アンケート調査」実施結果報告書』

授業出席率、目的の理解度、課題への取り組み、授業理解度、授業への意欲のいずれにおいても、文学部は肯定的な評価が 90%前後の高率であり、学修成果が上がっていることが見て取れる。特筆すべきは、「授業の内容を十分に理解できたか」という趣旨の設問に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の2つを足して肯定的な評価が 88.2%という高率であることで、文学部の教育システムが評価されたものと考えられる。

反面、外国語の運用能力、職業上役に立つ知識・技術などでは否定的評価も散見される。

3. 学修成果に関する点検・評価 (詳細版)

はじめに

一般的に学士課程教育における学修の成果は、学位取得によって証明される。したがって、学修成果に関する点検・評価は、一義的にはディプロマ・ポリシーによらなければならない。また、その到達度の測定・評価については、アセスメント・ポリシーによらなければならない。これは全ての大学が守るべきいわば鉄則である。本学部においても、その鉄則は当然に守られている。

文学部のディプロマ・ポリシーは、以下のとおりである。

基礎科目 4 単位、一般教育科目 28 単位、外国語保健体育 10 単位、専門教育科目 72 単位、自由選択科目 14 単位の計 128 単位を修得し、次に掲げる能力を身につけた者に学位を授与します。

- 1 論理的な思考と明快な言葉によって、地域社会あるいは世界の産業や文化に貢献できます。
- 2 社会や個人の生活における問題を柔軟に解決していく能力を有しています。
- 3 広い範囲にわたる理解力を持ち、日々移り変わる新しい状況に対応できる能力を有しています。
- 4 自ら目標を定め、その達成に向けて努力する能力と意志を有しています。

なお、本学部では「卒業論文」が必修であり、その水準は、理想的にはそのまま当該領域の学術論文として通用するレベルを、仮にそこまで至らない場合でも、最低限、学術的な考究の一端には至るレベルを求めています。通常、このレベルに至れば大学院への進学も視野に入ってくるようになります。

また、学修成果を測るための、文学部のアセスメント・ポリシーは、以下のとおりである。

進級率、退学率、成績評価、GPA、単位修得状況、学位取得率のほか、文学部で取得できる資格(注1)の取得状況によっても達成度を測定する。卒業時においては、英語・英米文学科、日本語・日本文学科それぞれの卒業所要科目の学修到達状況、及び卒業論文(必修)の成果によって、ディプロマ・ポリシーで求める能力の到達状況を評価する。卒業認定基準としては、2018 年度以降の入学生は「基礎科目」4 単位、「一般教育科目」28 単位、「外国語科目・保健体育科目」10 単位、「キャリアサポート科目・単位互換科目」14 単位、「専門教育科目」72 単位、計 128 単位の修得を卒業所要単位数とする。2017 年度以前の入学生は「基礎科目」4 単位、「一般教育科目」28 単位、「外国語科目・保健体育科目」10 単位、「自由選択科目」14 単位、「専門教育科目」72 単位、計 128 単位の修得を卒業所要単位数とする。

また、進路(進学、就職)の選択、卒業時アンケート調査、学修行動アンケート調査、学修成果アンケート調査により、学部教育の達成度を多角的に評価する。

学修成果の測定・評価については、アセスメント・ポリシーにおける、直接的評価と間接的評価がある。

1. 直接的評価

卒業率 (学位授与率) ; 2022 年度

- ・英語・英米文学科****%
- ・日本語・日本文学科****%

(ここでいう卒業率 Completion Rate とは、大学に初めて入学したものが、標準修業年限の4年で学士 Bachelor を得て学業を完成する割合をいう。学士入学等含まず)

資格免許等取得状況

本学部で取得できる資格免許の取得状況は、2022 年度実績で以下のとおりである。

- ・教員免許 ; X 名
- ・学芸員 ; X 名
- ・社会教育士 ; X 名
- ・日本語教員 ; X 名

進学率 ****%

以上について概観すると、まず卒業率については、現時点で日本の大学全体の卒業率が90%程度と推計されている (AERA DOT 2019/4) ものとほぼ等しい。各科目における単位認定が正当であるとすれば、文学部の場合、ディプロマ・ポリシーに従った学位授与が順当に行われているといえよう。

資格免許取得状況については、伝統的な教員免許 (英語、国語) の取得者が最も多いが、学芸員、社会教育士の資格取得者も一定程度ある。反面、かつては多くが取得した日本語教員の資格については低調に推移しているが、当該学年において時間割上の問題があった (隔年開講であるのに、他の科目とバッティングした) こと、またこれについて十分な説明がなかったことなどが影響している可能性がある。

2. 間接的評価

次に、間接的な評価として、就職率、及び学生に関するアンケート調査の結果から見えてくる課題について述べる。

就職率 2022

- ・英語・英米文学科****%
- ・日本語・日本文学科****%

(ここでいう就職率とは、分子が「就職者+進学者のうち就職しているもの」で、これを分母「卒業者-大学院進学者-外国の学校への入学者+進学者のうち就職

しているもの」で割ったもの)

各種アンケート調査—「卒業時アンケート」「学修行動・学修成果アンケート調査」

「卒業時アンケート」「学修行動・学修成果アンケート調査」を実施した結果から、注目すべき事項について述べる。

まずこの「卒業時アンケート」により、2022年度卒業生の学修成果について述べる。
(資料⑨)

このアンケートによれば、授業出席率、目的の理解度、課題への取り組み、授業理解度、授業への意欲のいずれにおいても、文学部は肯定的な評価が90%前後の高率であり、学修成果が上がっていることが見て取れる。

特筆すべきは、「授業の内容を十分に理解できたか」という趣旨の設問に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の2つを足して肯定的な評価が88.2%という高率であることで、文学部の教育システムが評価されたものと考えられる。

反面、外国語の運用能力、職業上役に立つ知識・技術などでは否定的評価も散見される。特に後者は、特定の職業に直結しない学部の特長によるものとは言え、なお改善の余地があることも示している。

次に、2022年度版「学修行動・学修成果アンケート調査」の結果により、文学部学生の学修行動に関する主要な部分について述べる。(調査した全ての項目について述べることはできないので、添付資料⑩を参照されたい。)

「学習行動・学習成果アンケート」文学部の分析

1週間の登校日数；1週間の登校日数は5～6日が最も多いが、3～4日という学生が23.3%あり、他学部に比して登校日数が少ない。(アルバイトの比率、サークル活動への参加状況などは大差ないにも関わらず)

出席；授業出席の割合は社会福祉学部と大差ない(看護学部との差は大きい)。興味関心のある授業については、40%以下が全学部別で最も多く、入学後にあまり積極的になれていない層が4分の1程度あるとみられる。

欠席；理由なく欠席した割合は20%以下とするものが最も多い。

これで見ると、文学部の学生は、全体としては勤勉に学修しているといえよう。学科別ではほとんど差がない。ただし、勤勉性では看護学部に劣るように見える。

興味・関心；「興味・関心のある授業」があるとする割合についてみると、60%以上とするものが44.9%である。この数字は、社会福祉学部よりわずかに低く、看護学部よりは10%程度低い。

授業の難易度；上記に関し、「授業の難易度」について見ると、「やや易しい」が15%あるところから、優秀な学生にとって授業が易しすぎて興味を失う例があることが懸念される。特に、「かなり難しい」が文学部全体で0.3%、日本語・日本文学科で全学年を通じて0%というのは理解に苦しむ数字である。講義が安易にすぎるようにも思えるが、現実にGPAを見てみると単位修得が容易ということは決してないので、なぜアンケートではこのような答えになるのか、回答者群の性質/偏りを含め慎重な調査が必要なところである。

積極的な取り組み；「積極的な取り組み」では、むしろ他学部よりも高い数値が出ており、上記の数項目の結果と一見矛盾するので、今後、質問等の工夫で実態をさらに明らかにしていく必要がある。

予習；「自発的予習」では、49%が90分未満で、明らかに不足している。この傾向は、特に低学年で大きく、大学教育に馴染むのに時間がかかる学生が多いであろう事が窺える。「やっていない」が18.1%もあるのは由々しき問題であると言わなければならない。なお、ここでは英語・英米文学科と日本語・日本文学科で多少の差がある。

復習；復習では、66%程度が90分未満で最も多く、誇れる数値ではない。「やっていない」も20.1%ある。英語・英米文学科と日本語・日本文学科の間に見られる傾向性も予習と同じであるが、いずれにせよこれでは少なすぎる。

レポート・課題；「レポート・課題に費やした時間」では、週当たり「3時間以上」が55.6%あり、これは比較的に良い数字と言えるが（3学部の中で最も多い）、上記質問の答えと矛盾する傾向にあり、今後の検討が必要である。

授業以外の学習行動；「授業以外の学修行動」については、読書量が週当たり2冊を超えるものが12.8%と少なく、多くが2冊以下である。特に、英語・英米文学科の「読まない」が47.0%というのは、危機的な水準といえよう。

メディア；新聞雑誌等のオールドメディアについては、新聞を「読まない」が56.9%、雑誌等を「読まない」が33.5%を占めるのに対し、一日に一度もインターネットに触れない者は1.5%と少なく、新旧のメディアで際立った対比をみせる。なお、英語・英米文学科で雑誌等を「読まない」が47.0%と際立って多い数字であるのは訝しく、更なる調査が必要と思われる。

ゲーム；ゲームについては、どの学年においても日本語・日本文学科の学生のほうが積極的で、「やっていない」学生が英語・英米文学科では 41.0%いるのに対し、日本語・日本文学科では 15.0%と、際立った対比を見せる。

図書館；図書館の利用率は、文学部としては低い。特に、全く利用していない層が 22.1%、英語・英米文学科のみに限れば 31.0%いるというのは由々しき問題と捉えられる。

以上を総合して、文学部の場合、インターネットやゲームなど現代的メディアとの親和性が高いが、新聞・雑誌・図書などのオールドメディアとは距離が開いている。最大の問題は、予習復習共に時間的に不足であることで、中でも特に自発的な学修の時間が少なく、自ら問題を発見して積極的に学び、自ら解決していくという大学生にふさわしい姿勢が身についているとは言い切れない。

【課題】

以上の検証をとおして見出された課題は次のとおりである。

- 1) 進級に必要な通年の成績評価 (GPA) と年間の最大修得単位数 (CAP 制) が適切であるかどうか、再検討が必要である。(改善済み)
- 2) GPA などを利用した追跡調査は、行われているが不十分であり、更に精密な調査が必要である。(進行中)
- 3) 学生の学修が総じて不足している。特に、自発的な学修の意欲が低く見えるのは問題である。(検討中)
- 4) 卒業論文以外に、卒業時の学力 (達成度) を測定する手法が必要である。(検討中)

【課題解決・改善方策案】

なお、改善する手がかりを一部、述べれば以下のとおりである。

進級と CAP 制については、上述した通りの改革が行われた。

卒業時の達成度については、新たに包括的な「卒業試験」などを設けるという案、学年の進行途中 (例えば 2 年生の末期) に学力補充のための補講および試験などを設ける案、または 4 年間の全トータル GPA を利用するなどの案があり、いずれも検討中である。

資料一覧

- 資料① カリキュラム表
- 資料② 「求められる学部学生像とカリキュラム」
- 資料③ 「新カリキュラムの改革重点事項」
- 資料④ 科目ナンバリング表
- 資料⑤ カリキュラムツリー
- 資料⑥ 2021 年度開講科目受講者数一覧
- 資料⑦ 文学部オフィスアワー一覧
- 資料⑧ 資料⑦に併記
- 資料⑨ 2022 年度卒業時アンケート
- 資料⑩ 2022 年度学修行動学修成果アンケート調査